

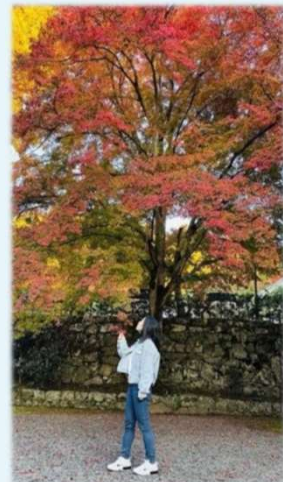


## 医療の現場アラカルト - Vol.15

## 中国語担当 尹さん

東和通訳センターで医療通訳者として働き始めてから、あっという間に2年が経ちました。私が医療通訳者を志したのは、言葉の通じない患者様と医療従事者が、お互いに理解し合うためのお手伝いができ、その達成感にやりがいを感じたからです。通訳をしている中で、患者様や医療従事者から「よかった」「本当に助かります」と言ってもらえることがあります。その言葉に救われ、今、この仕事をやり続ける一番のエネルギーにもなっています。

医療通訳は、医療従事者と患者様の会話を通訳するだけでなく、間接的に治療を支える役割も担っています。私の経験の中では、国を超えた診療情報提供に関わったケースがありました。現在の治療に必要な情報を得るため、患者様が中国で入院されていた当時の診療情報について、連日、中国の病院につないでほしいという依頼がありました。10数年前の受診歴を調べようにも、主治医以外には分からない状態。その医師は多忙で、いつ電話をしても診察中・手術中・会議中と、なかなか連絡が取れず、それでも粘り強くかけ続けた結果、数日後に情報が得られました。患者様の治療のお役に立てたと信じています。



また、医療通訳は命にかかわる通訳だと思っています。だからこそ、その責任の重さを常に意識して仕事をしなければなりません。私はこの世界での経験はまだ浅いのですが、「自分のミッションを見つけた!」と、とてもうれしく思っています。これからもこの使命感を持って、より良い通訳ができるように自己研鑽しつつ、医療現場で困っている多くの患者様や医療従事者の力になるように頑張っていきます。

プロでも迷う、  
日常の言葉

外国語ネイティブの医療通訳士が久しぶりにファストフード店に行ったときのこと。注文をした後に、店員さんから「イートインでよろしいですか?」と聞かれたところ、耳が全く反応しない…。もう一度聞いても意味不明。結局5回目ですら「eat in!」=「店内で食べる」という意味だと理解。脳内で何度も「イートイン=宇宙語?」と変換していたそうです。

さらに面白い勘違いもあります。段差のない”ノンステップバス”を、なぜか「デコボコ道で揺れないバス」「ステップしないバス」と思い込んでいたとか。また、推しが「妖精」になったと聞き「陽性?」と、一瞬パニックになる人も。歯科に行った人が、受付の人から「次は抜糸、その次は抜歯、次でまた抜糸」という説明を受け、「バッシ」の連続に、「毎週歯を抜かれるの!?!」と、一瞬驚いたり。

日常には、言葉のトラップがいたるところにありますね。言葉は便利だけど、たった一言から混乱を招くことにもなるかも…「丁寧に確認しながら通訳をしよう」と改めようと思える機会でした。

## 今月のトピックス

“友達”ってどこから?  
～文化で変わる距離感～

私の母はペルー人ですが、一度でも会ったことのある人のことを「友達」と呼びます。12歳から日本で育ってきた私は、それをどうしても理解できませんでした。友達とは、もっと関係が深いものではないのか。もっと時間をかけて、ようやく呼べるものではないのか。そんなふうに考えていたので、母が「昨日、友達に会ってね～」と話すと、どこかモヤモヤした気持ちを抱いていました。

ある日、通訳センターで「友達ってどこから?」というテーマについて話す機会がありました。ママ友という概念はあるのか、最近は日本でもパパ友がいるらしい、ではパパ友もいるのではないかと話題は広がり、英語通訳士の話では、海外では「ばあば」がとても充実した生活を送っているという話にもなりました。孫の習い事の送り迎えのために仕事を辞め、とても活動的に過ごしていると聞き、それはとても素敵だなと感じました。

日本では、お互いの距離感を大切にすることがありますよね。一方で、ペルーでは人と人の距離がとても近いのかもしれない、と思うことがあります。例えば通訳の場面で、患者さんから「私の友達です」と紹介されたことがあります。そのとき私は、「違います」と否定するのは失礼にあたる気がして、「医療通訳士の〇〇です」と自己紹介をしました。こうした小さなハプニングもありますが、「友達」だと思って接して下さる外国人患者さんに、救われることも少なくありません。通訳が終わったあとに「またね～!!」と手を振ってくださると、そのやりとりがエネルギーになって、また次に進むことができるのです。

